

全国科学博物館協議会令和6年度海外先進施設調査報告

レッジョ・エミリア市で取り組まれているレッジョ・エミリア・アプローチの現地調査

《所属館園名》多摩六都科学館 《氏名》佐々木 有美

1. 研修期間 2024年11月9日(土)～16日(土)

2. 研修施設 ・ローリス・マラグッツィ国際センター(ドキュメンテーションセンター、アトリエ、展示室)
・REMIDA(クリエイティブリサイクルセンター)
・RODARI乳児保育園

3. 具体的な実施内容

【背景】

・多摩六都科学館は乳幼児や児童だけをメインターゲットにしている施設ではないが、乳幼児・幼児・小学校低学年の来館が多く、詳細なデータはないため肌感覚ではあるが、入館者層は年々低年齢化の傾向がある。幼児に向けた学びの場はどのように構築することができるのかについて考え、調査することとした。

【研修先の選定】

・レッジョ・エミリア市でうまれたレッジョ・エミリア・アプローチは三大幼児教育のひとつで、日本でも大きく注目されている。当館では外部から講師を招き、2015年度より年に2回、未就学児を対象にレッジョ・エミリア・アプローチを実践してきた。レッジョ・エミリア・アプローチでは「環境を整えることで子どもは自ら探求をはじめ、能力が引き出されていく。」という考えがある。実践の中で様々な素材(自然物・人工物)をテーマに合わせ配置することで、未就学児が自ら生き生きと素材を探究し表現する姿が見られ、科学の根源である観察眼を養う機会になっていると実感している。レッジョ・エミリア・アプローチを深く学ぶことで、幼児向けのイベントだけではなく展示室、企画展など様々な場面にも新たな視点を取り入れ生かすことができると考え、レッジョ・エミリア市を研修先を選んだ。

【研修内容】

JIREAのレッジョ・エミリア現地スタディツアーに参加

(1) ローリス・マラグッツィ国際センターでの研修

- ①レッジョ・エミリアにおける教育プロジェクトの価値観(講義)
- ②ドキュメンテーションセンター(視察・講義)
- ③「アトリエの文化」について(講義)
- ④プロジェクトの事例紹介1: 乳児保育園 ヒナギクの楽観主義(講義)
- ⑤プロジェクトの事例紹介2: 幼児学校 コマ回し;物理と数学で遊ぶレッジョの子どもたち(講義)
- ⑥アトリエ「写真—光で描く—」(ワークショップ)
- ⑦センター内にある展示室やアトリエの見学

- (2) REMIDA(クリエイティブリサイクルセンター)への視察、講義
- (3) RODARI乳児保育園への訪問、ペタゴジスタ・教師との対話

4. 成果及び結果（実施した研修の成果や感想、特記事項等を具体的に記述して下さい。）

レッジョ・エミリア市では子どものプライバシー保護の観点、知的財産のアーカイブとしての写真、言葉、音などを重要視している観点から、多くの場所での録音や写真撮影ができなかったため、主に文章で報告する。

(1) ローリス・マラグッツィ国際センターでの研修

2006年に開設し、レッジョ・チルドレンという団体が運営している施設。レッジョ・エミリア・アプローチに対し議論・交換・出会いの場として機能している。



図1. 国際センター外観



図2. 国際センター内研修室

① レッジョ・エミリアにおける教育プロジェクトの価値観（講義）

講師：Alessandra Braglia氏（ペタゴジスタ：教育の専門家。レッジョ・エミリア市の公立乳児保育園・幼児学校には必ずいる。通常は一人のペタゴジスタが複数園を担当しており、各園の教師やアトリエスタと連携し、プロジェクトの方向やあらゆる事象についての相談役として機能している。）

・歴史的背景：レッジョ・エミリア市は第一次世界大戦前から幼児教育に向き合っていたが、第二次世界大戦後に郊外にあるVilla Cellaの市民が定めた戦後の町の方針が女性達が提案した学校建設であったことが、現在の「教育が町の中心のテーマ」という地域性を強く決定づけた。（イタリア全体でみても、女性の社会的な運動が盛んな地域という背景がある。）現在では子ども達への教育は必要性から権利へと変化している。

・ローリス・マラグッツィ：現在のような世界的に注目をあびるレッジョ・エミリア・アプローチの要素を生み出した中心的な人物。教育だけではなく様々な分野の視点から学び、考え、分野の境目（国境）から全体を見てプロジェクト・アプローチを生み出した。「教育は学校の中だけの問題ではなくレッジョ市民全体、市民の関係性が大事だ」と語っていた。現在でも彼の詩「冗談じゃない。100のものはここにある。」は大事にされており、研修中あらゆる場面で語られていた。

・疑問を持ち続ける：「疑問を持つ」という事は常に考え、内省すること。質問は疑問の素であり、教育現場でもとても大切にされている。研修制度やセンターを整備し世界中の人々と対話することは、世界中からの問いをうけることであり新しい視点を取り入れる機会にもなっている。

レッジョ・エミリア市民は自分たちの歴史をととても重視しているが、同じように未来へのまなざしも重視している。常に「改革」を意識して活動をしており、町づくりにも反映されている。（例：歴史的な広場やローマ時代からの街道も大事に残しているが、駅はとてもモダンな建築デザイン）

・共同体：「子ども」「（学校で働くすべての）大人」「家族（保護者）」が学校の活動に参加す

る権利を持っている。また、市民と一緒に活動することも大切にしている。難しい場面もあるが、対話を通し、一緒に体験し向き合うことで強い絆がうまれる。町全体が団結することで政治的に訴える力（教育への予算が減額されたりする場面での抗議活動など）にもなる。現在、レッジョ・エミリア市での教育費の予算は年間2000万€であるが、常に予算が減る危機にはある。

・信頼：子どもに対し可能性を感じ、信頼することが大切。子どもに対してどのようなイメージをもつのかも大切で、どこまで一緒に探求し、体験して、どの道を進むのかを考えることが重要。

【学校の空間設定】

・コンテキスト：「第三の教育者」と言われている。日本語では「環境」と訳されることが多いが、関係性なども含まれた意味で使われている。

・複雑性：学校にはモノが複雑に配置されている。物事は複雑であるが、人生の主人公は自分であり、主体的に複雑なことに関わっていく力をつけていく必要がある。複雑性や美的性は理屈ではなく、実践的に学ぶことが大切。身体をどれくらい使うかで学びの質や深さが増していく。「正解を一つに決めずに、頭だけでなく手を使い、考えるだけではなく体験を通して理解していく。」とローリス・マラグッツィも語っていた。

・現在の課題1：現在、共働きの家庭が多く、昔よりも個人主義的な考えを持つ家庭が多くなっている。両親の仕事と子どもの教育（学校教育・家庭教育）のバランスが子どもにとってどのような影響があるのかについて議論するグループがある。「お迎えが渋滞で遅れ迎えの時間に間に合わない」などを個人の問題として捉えるのではなく、学校問題として位置付け、企業（勤務時間）や市とも協議し、問題解決を進めている。問題はすぐに解消できなくとも、問題に向き合っていくことが重要だと考えている。エミリア・ロマーニャ州の地域の特徴として、共同体として活動してきた歴史がある。市が市民活動をサポートする習慣がある。市民グループと市長との対話の機会も年に4回あり、常に対話をしながら、議論を確定していく。

・現在の課題2：講義の中では、「対話」「会話」などニュアンスを使い分けるように意識していると伝えられた。最近では「話合う」ことが難しくなっていて、それは教師同士、保護者と教師など様々な場面で課題になっている。話し合いが「会話」ではなく「議論」になることが多いことが問題になっている。議論自体は悪いものではないが、なるべくポジティブに話を進めていけるようにしている。

② ドキュメンテーションセンター（視察・講義）

講師：アンナ・ソーザ氏（ドキュメンテーションセンタースタッフ）、

Lucia Colla氏（教師教育者：ペタゴジスタの研修などもしている）



図3. ドキュメンテーションセンターの様子



図4. 様々な言語で書かれた本やカタログ

ドキュメンテーション：レッジョ・エミリア・アプローチの特徴のひとつ。真の学びはプロセス（試す、間違える、乗り越えるなど）の中にある。という考えから、子どもの様子（表情、ことば、身体的表現、絵、造形物、などあらゆる表現）を文章、写真、動画、作品などの形で記録している。

・ドキュメンテーションセンターはレッジョ・エミリア市の乳児保育園・幼児学校で行われたすべての経験（ドキュメンテーション）を保存している。図書館のような雰囲気、過去のドキュメンテーションなどの資料から新しいアイデアやヒントを得ることができる場になっている。他にも、様々な分野（哲学・美術・教育学・建築・社会学・文化人類学・心理学など）の専門書、演劇研究所としての資料や映像なども閲覧できる。

・レッジョ・チルドレンはレッジョ・エミリア・アプローチを世界中で共有するために、冊子制作、展覧会の企画・運営、展覧会の内容の書籍化なども行っている。ドキュメンテーションはそれらの活動にも活用されている。

・ドキュメンテーションセンターの構想は1980年代にはあり、94年に開設し、2006年に現在の場所に移った。2021年よりジャンニ・ロダーリ演劇研究所としての機能も併設している。

・訪れた時期は昨年からの探求プロジェクトのテーマ「まち」についての展示コーナーがあった。6月に園ごとにまとめられた冊子の中から選ばれたいくつかの学校で行われたプロジェクトを1冊の本にもまとめられていた。プロジェクトの年間テーマはペタゴジスタが決めている。同じテーマでも、地域、年齢などの違いから全く違うアプローチになるため学校やクラスごとに個性がでる。

〈所感〉

過去の事例の知見があると、同じテーマのプロジェクトに対してさらに発展的なアイデアが生まれる可能性もあり、とても良い施設だと感じた。センター内には常勤のスタッフがいて、整理・保存に従事していた。それ以外にもドキュメンテーションの研究など、ペタゴジーの調査研究の場にもなっているようだった。また、演劇研究の機能も併設しているのでレッジョナラのテーマ設定やレッジョ・エミリア市立の学校でのプロジェクトの方向性、課題に対しての議論など、レッジョ・エミリア・アプローチの根源がこのセンター内にあり、リードしているように感じた。

ドキュメンテーションは、ただのネタ集ではなく、子どものプロセスやそれに対しての教師のコメントも丁寧に残していることに価値があると感じた。ただ、ドキュメンテーションには個人情報も含まれているので、「写真などを撮影しない」という規約をつくっても、日本では広く公開するのは難しいと感じた。

③ 「アトリエの文化」について（講義）

講師：Marco Spaggiari氏（国際センターのアトリエスタ）

アトリエスタ：芸術の専門家であり、教師や子どもたちに芸術の専門性を共有していく役割を担っている。60年代からアトリエスタが学校に常勤することが重要視されおり、1972年にすべてのレッジョ・エミリア市立の学校に常勤で配置されるようになった。日常的に学校の中で活動することが大事。

アトリエ：レッジョ・エミリア・アプローチではアトリエという言葉をつくりだすようなニュアンスで使っている。手を使いながら、作りながら、表現しながら美的感覚を養う場所。幼児学校には各クラスにミニアトリエがあるが、学校全体が学びの場でありアトリエであると考えている。

空間に対しての敏感さ：学校のあらゆる空間が学びの場であり、意味をもてるようにそれぞれの空間の可能性を考えないといけない。ロフト、階段、ガラス張りの壁、普通の壁、窓際（日光の当たり方）など空間の特徴を把握し、体験の構成を考えないといけない。学校内だけでなく、まち全体もすべてが学べる場という視点から捉え、感じることをすることが理想。

〈具体的なコンテキストの作り方〉

例：花を表現する

カタチに注目してほしい時：黄色い花の場合、様々な黄色と緑のグラデーションの色紙と色鉛筆。
ライトテーブル。

見る角度によって変わること注目してほしい時：ビデオカメラやマイクロスコープ（視点を変えるため）、たくさんの色の鉛筆、マーカー、絵の具

目的に合わせた画材などの道具を選び配置する。紙のカタチや大きさも目的により変える。

〈所感〉

イベント企画や展示をつくる際、私たちも持っている情報やモノを全て展示するのではなく、企画意図に沿ったものを選ぶことは普段から行っているので共通点も多く感じた。ただ、アトリエスタは、本当に細かなディテールまでこだわってコンテキストをつくりあげており、徹底して手を抜かない姿勢はとても勉強になった。

④ プロジェクトの事例紹介1：乳児保育園 ヒナギクの楽観主義（講義）

講師：Lucia Colla氏（教師教育者：ペタゴジスタの研修などもしている）

「Bordercrossings -Encounters with living things Digital landscaped-」というテーマで幼児学校10校、乳児保育園5園で3年間のプロジェクトを行った。このプロジェクトはあらかじめ展示会を開催し、来場者にも体験してもらうことが決まっていた。そのため、ドキュメンテーションも専属のカメラマンが行う場面もあった。

〈テーマ「自然とデジタルの境目（国境）」について〉

「詩的感覚」：特にデジタルに対しての詩的な視点から捉えることとは何かについて考え、それを自然がどう支えるのかと位置付けた。技術は環境に対しての「物事」と「感性」の関係性を補強してくれると考えた。子どもたちがテクノロジーにおぼれ、使われないために、子どもたち自身がテクノロジーを能動的に使うことができるように意識した。「デジタルが表現のツールではなく、デジタルは表現のためのツール」だとレッジョ・チルドレンでは考えている。それと同時に、デジタルは表現のためのツールとして使うだけでなく、新たな視点で自然を見ることが出来るツールとしての役割もあると考えている。

「本物（実物）を探究する」ことを大切にする：本物を探究することは、人間として自然との関係性を文化人類学的に考え、探索し、会話をしていくことでもあり、それはアイデンティティを構築することでもある。人間は社会性の生き物であり、他者の視点と自分の思っていることを交換していくことでアイデンティティが構築されていく。

〈事例紹介〉

ロダーリ乳児保育園 2～3歳児 24人（プロジェクト活動は小グループに分かれて行う）教師3人
「この体験をどの様に記録し、残していくのか」という教師の研修も兼ねて行われた。

詳細は写真、動画、絵、子どもの言葉、などを介して紹介された。プロジェクト活動はあらかじめカリキュラムを組むことはせず、子どもの様子を見ながら興味関心を察し、探究を深めていく活動なので、子どもの様子から大人がどう考え、プロジェクトの方向をつくっていたのかについての詳細も語られた。

⑤ プロジェクトの事例紹介2：幼児学校 コマ回し;物理と数学で遊ぶレッジョの子どもたち（講義）

講師：Alessandra Braglia氏（ペタゴジスタ）

Marco Spaggiari氏（国際センターのアトリエスタ）

＜事例紹介＞

ミケランジェロ幼児学校 5歳児 教師3人（内パート教師1人：1人、特別な権利を持つ子どもがいたため、パート教師が入った）

テーマ：コマ回しは身近なもので、みんなで一緒にでき、身体を使うことができるという点から選んだ。

詳細については写真、動画、絵、子どもの言葉などから、プロジェクトのプロセスが語られた。印象的だったのは、いろいろな空間や場所でコマ回しを楽しんでいた子どもたちがコマのためのコースをつくって遊び始めた場面。「大きなコースをみんなで作りたい」→「共通認識が必要」→「コマの動きをピクトサインにするアイディアが出る」→「『ジグザク』『ジャンプ』『滑り台』『ストップ』など必要な動きを洗いだし、みんなでピクトサインを考える」→「大きな黒板にコースの設計図をかく」→「コースをつくる」というプロセス。

カタチにしていくときに、大人は子どもの意見を聞き必要な素材を選び準備したり、サポートをしていく。そうすることで子どもたちの探求が深まっていく。

＜④⑤に対しての所感＞

子どもの発言を紹介する際、必ず「言葉」「発言した子ども名前」「日付」「状況」がセットで紹介されていた。他の様々なドキュメンテーションでも同じように記録されていた。子どもの発した言葉をとても大事にしていると改めて感じた。

④⑤の講師に限らず、研修を通し出会ったすべての子どもに関わる大人（ペタゴジスタ、アトリエスタ、教師など）に共通して、子どもの言葉、行動、表情から読み取る力に圧倒された。1枚の絵や、3分程度の動画から20分ほど語っている姿が印象的だった。とても小さな出来事のように見える事象でも、子どもの学びが詰まっていることが理解できた。ドキュメンテーションは子どもに関わる全ての大人の考察と合わせてつづられていることで、その場にいなかった私たちもプロセスの中の真の学びについて理解することができると感じた。

④の講師のLucia Colla氏の「ローリス・マラグッツィは『楽しまなければ意味がない』という言葉を残している。プロジェクトの体験に対し、楽しくなければ意味がない。それは子どもだけでなく大人も同じ。「良い先生」と「自分自身が楽しむ」という事に初めは矛盾を感じていたが、そうではない。自分も楽しまなければ意味がない。」という言葉が印象的だった。私たちもまずは講師が面白いと思わなくては、参加者には伝わらないと考えて企画をしているので、共通点を感じ、自分たちの仕事への自信につながった。

⑥ アトリエ「写真—光で描く—」（ワークショップ）

講師：アンリア・ジャンネルリ氏（国際センターのアトリエスタ）

テーマ「動き」で写真を撮るワークショップ。6人ごとにグループに分かれ実施。

写真は動きを止めて記録するメディアなので、テーマの「動き」と「写真」の間には矛盾が生まれる。この矛盾をどう表現するのかがポイントとなった。

■1：グループごとに「動き」の概念を3つの言葉に絞る。（20分間）

各グループで対話をし、言葉を決める。

■2：他グループと動きの概念について共有する

各グループで決めた3つの言葉を全体で共有し、その言葉を選んだ理由を共有した。その間にファシリテーターが、グループごとにキーワードとなる言葉を選出する。

■3：各グループで、上記で決められたキーワードを表す5枚の写真を撮影する。（60分）

最近はスマホで深く考えずに撮影する機会が多いが、今回は思いをしっかりとのせて撮影する。

■4：シェアタイム



図5 連続性を表現した作品のうち1枚
〈所感〉



図6 ワークショップをしたアトリエ

「動き」の概念を3つの言葉で表現する作業はとても面白かった。グループの6人で話していると、それぞれ「動き」に対し持っているイメージが違っており、お互いのイメージを共有していく作業は、新たな視点を得られる感覚があった。研修では終始、手を動かすことの大切さと同時に、概念やイメージを他人と対話を通し共有していく大切さも語られていた。このワークショップでは実感を通し対話の大切さを感じることができた。

私たちのグループのキーワードは「連続性」だったので話合いの結果、影絵をモチーフにし、影の移り変わりを連続的に撮影することにした。アトリエには様々な素材が置いてあり、どんなものがどう使えるのかを全員で試しながら写真を撮影していった。自然と役割が生まれ、一体感を持って作品を作り上げていく作業はとても楽しかった。

最後のシェアタイムでは他のグループの作品を見ながら撮影者の解説をきき、他グループが感想を伝えあった。他グループのキーワード「重さ」「オノマトペ」「音」「心・ゆらぎ」であったが、どのグループも表現が全く違っており、撮影する手法にも違いがみられ、どの作品も見ごたえがあった。あえて「動き」に対し様々なアプローチになるように各グループのキーワードが選択されていたと感じ、ファシリテーターの技量を感じた。

⑦ センター内にある展示室やアトリエの見学

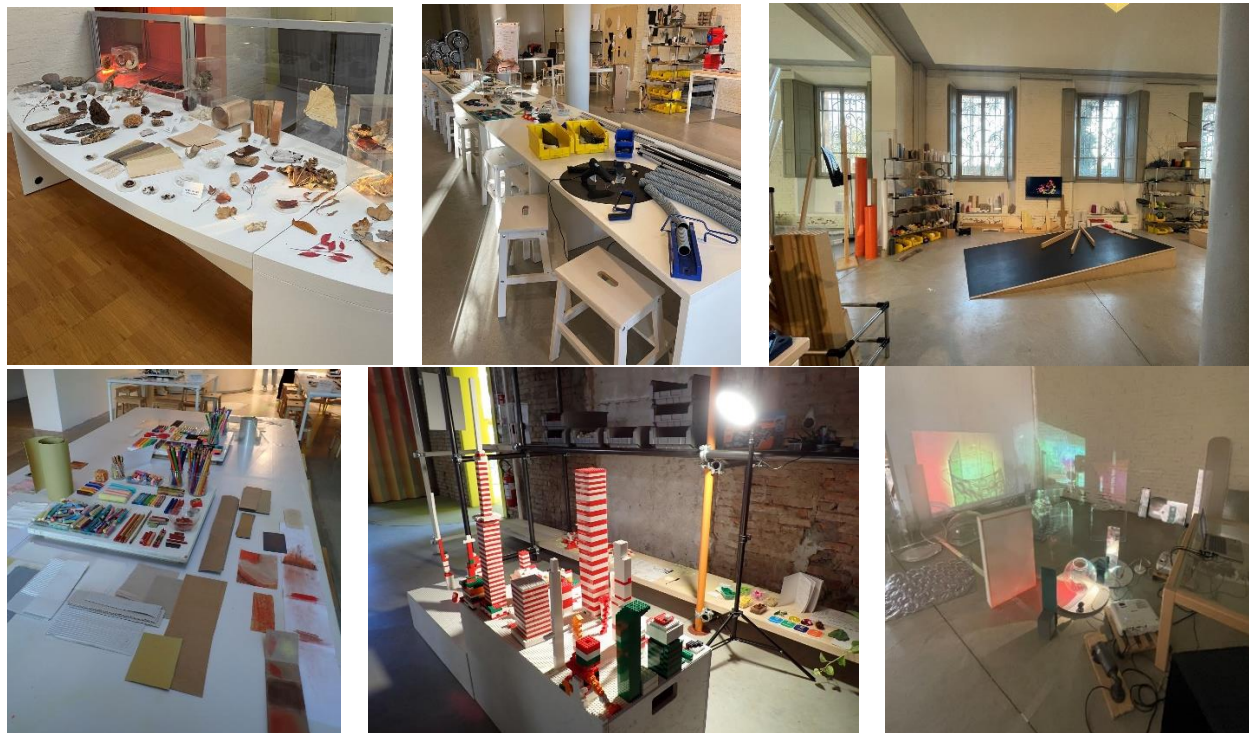


図7～12 国際センター内にある様々なテーマのアトリエ

〈所感〉

国際センターの中にはたくさんのアトリエがあり、すべての場所がとても楽しそうな空間になっていた。空間に入っただけで様々なアイデアが湧いてきて、コンテキストの重要性を身をもって感じることができた。

アトリエだけでなく展覧会も開催されており、まるで美術館での企画展のようなしつらえになっていた。様々なテーマのプロジェクトごとにドキュメンテーションがまとめられており、展示も多くあったがプライバシー保護の観点から写真を撮影することはできなかった。展示ケースは作品ごとに特注されており、子どもたちの作品が国宝級の作品のように丁寧に展示されていた。展示の様子からも、レッジョ・エミリア市にとって、子どもたちの100の言葉（様々な表現）がとても大切に重要なものだということが伝わってきた。

(2) REMIDA(クリエイティブリサイクルセンター)への視察、講義

講師：Laura Pedroni氏(組織コーディネーター)

3カ月ほど前に現在の場所へ移動した。この一帯はかつて工業地帯であったが、レッジョ・エミリア市が文化的交流ができる場所にするために買取をしているエリアの一角にある。REMIDAはニワトリの飼料を置いていた場所でもとても広く、天井も高い広々とした空間であった。

空間はいくつかに区切られており、用途別に色分けされていた。

緑→リラックスゾーン（ソファやコーヒーなどがある）

オレンジ→研究ゾーン（レゴ財団からの支援を受けた研究センターとしての役割もある。研究のポスター展示、映像、あそぶ空間の展示など。長期的な研究テーマ『遊びを通しての学び』はレゴ財団とも共通のテーマ）

黄色→モデナ大学の院生のための研究室

紫→多目的スペース（会議、ワークショップ、持って帰ることができる本の棚など）

赤→素材置き場。（素材提供（REMIDAの根源の活動 素材を集め、素材を教育現場に還元している）

REMIDAの活動：①素材提供 ②素材研究（使い方、素材の可能性の提示、研修プログラム）

素材：素材自体も表現のひとつ（100の言葉）と、捉えている。REMIDAにある素材は、地域の工場で作られてた部品。新しいが不良品（B級品、製造過多、色が悪い、シーズン外など）で商品価値がないもの。イーレン（ごみ収集など、ごみ関連やエネルギーを扱っている会社）が様々な企業から集めた新品だが廃棄になってしまうものをREMIDAが独自に選び並べている。

素材を受け取れる人：教育者や教育に携わっている人で、会費（30€/年）を支払っている

サステナビリティ教育の場：廃棄されるような素材を活用するという環境的な視点からの継続性もあるが、道徳的な視点からの社会権利としての継続性を学ぶ場でもある。「ごみでも視点を変えると活用価値がある。」ことを学ぶということは、「視点を変えると違う価値を見出すことができる」という学びにつながる。人間関係も視点を変えると変わってくるという意味で、社会的権利にもつながってくると考えている。



図 1 3 REMIDA外観

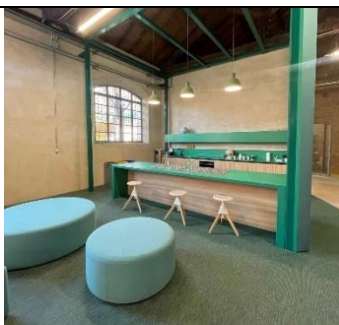


図 1 4 リラックスコーナー

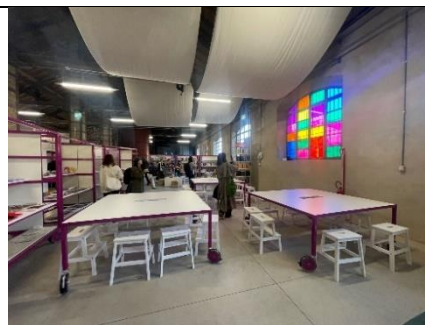


図 1 5 多目的スペース



図 1 6 1 7 1 8 REMIDAに置かれている素材

〈所感〉

空間に入るだけで「わくわく！」「なにかできそう！」と感じさせるコンテキストになっていた。素材の配置や空間の設定が魅力的だった。

REMIDAの活動は多くのボランティアに支えられているおり、ボランティアも「手芸が得意」「本が好き」など自らの特性に合わせて活動をしているという事だった。ボランティアも活動を通し、子どもの教育に関わることができ、市民活動の一環になっていると感じた。

素材の中には市民などから寄せられてきた中古品も含まれていると想像していたが、全く違っていた。不良品ではあるが、すべて新品の素材だったのは意外だった。日本では産業廃棄物は企業に廃棄する責任があるので、このように活用できるものでも廃棄物を譲渡することが難しい現状がある。REMIDAはごみ収集などを行っている企業や行政が入ることによって良質な廃棄物が生かされる体制がとられていると感じた。

(3) RODARI乳児保育園への訪問、ペタゴジスタ・教師との対話

講師：ペタゴジスタ1名、マリーナ氏（教師4年目）、サラ氏（教師4年目）

イタリアを代表する児童文学者ジャンニ・ロダーリから名づけられた乳児保育園。演劇にも精通していたことからピアッツァ（入り口の吹き抜けの大きな空間）には子ども用の演劇用の衣装が飾られていた。また、RODARIができる前はここに植物のための温室があったため、透明感（ガラス）を多用し土地が持っている歴史も感じられるように設計されている。

冬の庭：RODARIの特徴のひとつ。園庭と各クラスの教室の間にはサンテラスのようなガラス張りのスペースがある。園庭がとても広いが冬が長いので、外と繋がりを持てるために整備されている。

教室：室内で遊ぶスペース、ミニアトリエ、冬の庭、寝るスペース（2階ロフト）、階段+滑り台という構成になっていた。子どものプライバシー保護の観点などから、見学は子どもがいない時間帯であったので、各スペースに子どもたちの活動している動画や写真などドキュメンテーションとともに、おもちゃや素地も子どもが遊んだ後のような配置で置かれていた。

調理場：コスト面から、レッジョ・エミリア市が運営する学校だけには必ず設置されており、とても大切な場所と考えられている。アレルギーや栄養バランスを考えることはもちろんだが、食材も

学びのひとつと考えている。食事は文化の影響をととても受けており、食を通して美を磨き、他者との関係を築く機会とも捉えている。食材を育てたり、切ったり、食器類を並べたりと食育的な活動もある。

ドキュメンテーションの配置・種類：ドキュメンテーションは用途や目的により種類がある。

■1子ども向け：各教室には最近の活動を写真をメインにした大きなドキュメンテーションが壁に貼られている。自分たちの活動を振り返り思い出し、探求活動の継続性の目的で貼られている。

■2ワーキングドキュメンテーション：日々の活動に対し、実践を立ち会った教師やアトリエリスタがそのまま主観的に環境や問いかけ、子どもたちの姿や言葉、作品や表現のプロセスなどをその場で、あるいは活動後も含めて記載していったもので、学校内の大人や保護者も自由に閲覧できる。ワーキングドキュメンテーションがプロジェクト整理されていく。

■3資料として：冊子タイプ。これは毎年、1年間のプロジェクトの様子をまとめている。

■4新しい保護者や教師向け：廊下などに大きく貼られている園のアイデンティティーを示す。A1が横に3枚ぐらい繋がれているような展示ポスターのようなもの。

研修：教師は5時間/週の研修が勤務時間内に設けられている。子どもと離れ研修、研究、ミーティングをすることは義務であり、権利である。プロジェクトの方向を考えるミーティングや、ドキュメンテーションセンターでの研究、他の学校の教師と対話をするなど、自分で自由に研修時間を使うことができる。

〈所感〉

年季は入っている建物だが丁寧に使われていることが伝わり、とても居心地の良く、安心感がある空間だった。庭もとても広く、様々な植物が生えており、季節の変化を楽しむことができるように考えられていると感じた。

室内も整然と片付けられているというよりは、様々な素材がコーナーごとに並び、コーナーも複雑な配置をしていて入っただけですぐに遊びだしたくなる空間になっていた。講義で知識として得ていたコンテキストの設置の重要性について、園内に入り実感をもって理解ができた。

対応してくれた方々みな、対話、コンテキスト、ドキュメンテーションの大切さについて誇りをもって話してくれていたのが印象的だった。特に4年目の若手教師が、日本からの視察メンバーの質問にととても自信と誇りを持って長めに回答してくれていたのは印象的だった。こういった機会は、海外からの視察に対し、園内の各所を子どもたちの活動が感じられるような空間に準備することなども、過去の活動の振り返りにもなり、海外からの視察者の質問は彼らの研修にもなっていると感じた。世界中からの訪問者に彼ら自身が仕事に誇りと自信を持つことができ、視察への対応を通し、日々の活動をより丁寧にみることができるようになるのではないかと感じた。1クラスを複数の教師で担当するようにして、必ずベテランと若手の組み合わせになるように配置し、若手教育にも力を入れていると語っていた。こういったしくみづくりの面でもレッジョ・エミリア・アプローチの幅や奥行きを感じた。

調理師の方々もレッジョ・エミリアの郷土料理や飲み物、スイーツなどを用意してくれた。残業になっていたと思うが、誰一人嫌な顔ひとつ見せずにととても歓迎してくれていた。調理師の方々も自分たちの仕事に誇りを持っていることが伝わり、学校全体でレッジョ・エミリア・アプローチだと実感した。

5. 今後の課題等（今後の活動の広がり・深まりのための展望や問題点等を具体的に記述して下さい。）

【評価・ドキュメンテーション】

科学館の様々な活動の価値は、数字（開催回数、参加者数、応募率、満足度、理解度）で評価されることが多い。ただ、現場のスタッフは、イベントなどでの教育的価値は、数字に表れない部分にこそ表れ、重要な学びがあると感じる場面が多いが、数字にできない価値を示すことは難しい。

レッジョ・エミリア市では、活動の「プロセスの中に真の学びがある」との共通認識を持ち、子どものあらゆる表現に価値があり、それらの表現をドキュメンテーションというかたちで記録・保存することで、レッジョ・エミリア・アプローチの評価を高めていると感じた。ドキュメンテーションを書くこと、残すことの重要性が共有されていることで、日々の活動もより丁寧に子どもの様子を見ることができるようになっていると感じた。ドキュメンテーションを書くことはしっかりと活動を振り返ることにもなり、次の活動につながっていく。という良いサイクルにもなっているとも感じた。

当館では一人のスタッフが同時並行でいくつか企画を抱えているため、日々イベントや企画展の企画や準備に追われており、終わったイベントをじっくりと振り返り、スタッフ間で共有する時間はあまりとることができていない。企画や準備の時間と同じぐらい、スタッフ間での対話を通し振り返る時間も重要なのだと感じた。科学館の現場でレッジョ・エミリア・アプローチと同等のドキュメンテーションを取り入れることは現実的には難しいが、日々の活動で自分たちの活動の振り返りをする時間を、すこしずつでも確保していきたい。

【アーカイブセンター】

ドキュメンテーションのアーカイブセンターは、ドキュメンテーションを共有することでプロジェクト活動などを発展・進化していく為のしぐみのひとつになっており、とても重要な場所だと感じた。

現在、当館では良い意味でも悪い意味でもイベントのテーマ、目的、方向性など担当者に全権委任している事が多い。企画書や報告書は残しているが、詳細について（キットの細かな特性、物品の購入先、現場での参加者の詳細な反応など）共有されていることは少なく、同じテーマのイベントを組み立てる場合は過去の担当者から直接引継ぎを受ける必要がある。もちろん、引継ぎでコミュニケーションをとることはより詳細なことを知ることができ良い面もあるが、担当者が辞職した場合など、教室で見られる子供たちの変化や効果的な働きかけ方などの知見がゼロになってしまうこともある。

もし、全国の科学館のイベントや企画展の内容詳細について、ただの資料一覧だけでなく、子どもの学びのプロセスやそれに対しての担当者のコメントも丁寧に残されたものを、自由に閲覧できるセンターのようなものがあったら興味深いと感じた。同じテーマでも対象年齢や地域性がより比較され差別化し特色がでたり、発展していく可能性もあるのではないかと想像した。

まずは、どのような情報や資料があれば効果的なのか考え、館内で知見を共有できるように整理していきたい。

【記録のとり方・研修制度】

ドキュメンテーションに使われている写真や動画がどれも素晴らしく目や心を奪われた。これは現場の教師たちが撮影しており、撮影に関しての研修制度があるということだった。昨今、広報やイベント報告などはSNSなどを活用する場面が多く、1枚で語ることができる写真の力を感じてはいるが、自分たちでイベントを進行しながらの状況で魅力的な広報写真を撮影することは難しい。科学館の現場スタッフもカメラ撮影の基本的な研修なども必要だと感じた。

【館内全体の空間の活用を意識する】

学校全体をアトリエだと思ってみる視点はとても勉強になった。目的をはたすために一番効果が高い場所を考えるという視点の大切さを感じた。当館でのイベント企画では、イベントをいつもしているスペースで何ができるかという視点で考えることが多く、場所の特性を深い意味では考えてこなかったと気づいた。科学館の展示室やイベントスペースだけでなく、エントランスポーチや階段などあらゆる空間の特性を知り、学びの場になるという視点を得たことで新たな可能性を生み出す意欲がわいた。